

mediopos 11

2015.7.25 ~ 2015.8.18

【神秘学ポエジー～風遊戯 第27集】

media-photo-poesie ヴァージョン

神秘学遊戯団



■伊藤邦武『ジェームズの多元的宇宙論』(岩波書店 2009.2)

「ウィリアム・ジェームズの思想はある種の汎神論であり、宇宙霊魂的な世界観とも親近性をもっている。しかしながら、それは絶対的な意味での一性 (Einheit) を否定し、世界の根本的な多元性を強調する点で、特異な性格をもっている。彼の宇宙論は「ひとつの多元的宇宙 (a pluralistic universe)」というユニークな世界像である。彼の抱くヴィジョンとしての宇宙は、そのうちなるすべてが互いに連続しあっているという意味では、一つの宇宙である。しかしすべての連続しあっている要素が、絶対的な意味での一者、一つの原理、一つの靈魂、一つの存在に最終的に収斂することを徹底的に否定し、中心となる何かに基礎づけられるような一元論としての体系化を否定するという意味では、純粋な「一即一切」の思想とは別の思想である。」

「華嚴の世界は多重性と人格性という意味でも、ライプニッツの形而上学的世界像に対応している。ライプニッツにおいても、無数のモナドからなる一つの宇宙は、あくまでも「一つの可能世界」である。現実のこの世界を含む可能世界は、少なくとも神の知性においては、無数に考えられる。一つの世界が無数の実体からなり、さらにこの無限者からなる世界が無数の可能世界の一つであるという点で、ライプニッツの世界も大規模に重畳した宇宙のヴィジョン、多元的宇宙論であるといえる。」

「宮沢賢治の生前未発表の童話の一篇に、「インドラの網」という短編がある。(・・・) / 賢治が、銀河を旅するジョバンニの導きの手として登場させたブルカニロ博士。ジョバンニが旅の終わりに南十字星を越えてプレシオスやマゼラン星雲を目の前にし、「琴の星がずうっと西の方へ移ってそしてまた草のやうに足をのぼし」たそのときに、汽車や天の川とともにぼかっと光ってなくなってしまう、またぼかっと光ってずっと消えてしまい、最後にはもうそれきりになってしまった、一人の「学者」——。その不思議な学者の面影は、純粹経験と多元的宇宙論を説いたジェームズの姿も重なっていたのではないだろうか。」

一即多
多即一

有即無
無即有

色即空
空即色

生即死
死即生

我非汝
汝非我

我愛汝
汝愛我



■ピーター・メンデルサンド『本を読むとき何が起きているのか／ことばとビジュアルの間、目と頭の間』
(フィルムアート社 2015.6)

「読書」と呼ばれる物語がある。私たちは皆、その物語のことを知っている。それは、「心象」と「描写すること」の物語である。／読書の物語は、記憶された物語だ。私たちは読書する時、没頭する。没頭すればするほど、経験に対して分析的な思考を向けることが難しくなる。だから、読書の感想を語る時、私たちは「読んだ」記憶について話しているに過ぎない。／そしてこの読書の物語は正確ではない。／読書体験を思い出す時、私たちは連続展開するイメージ群を見ているのだ。」

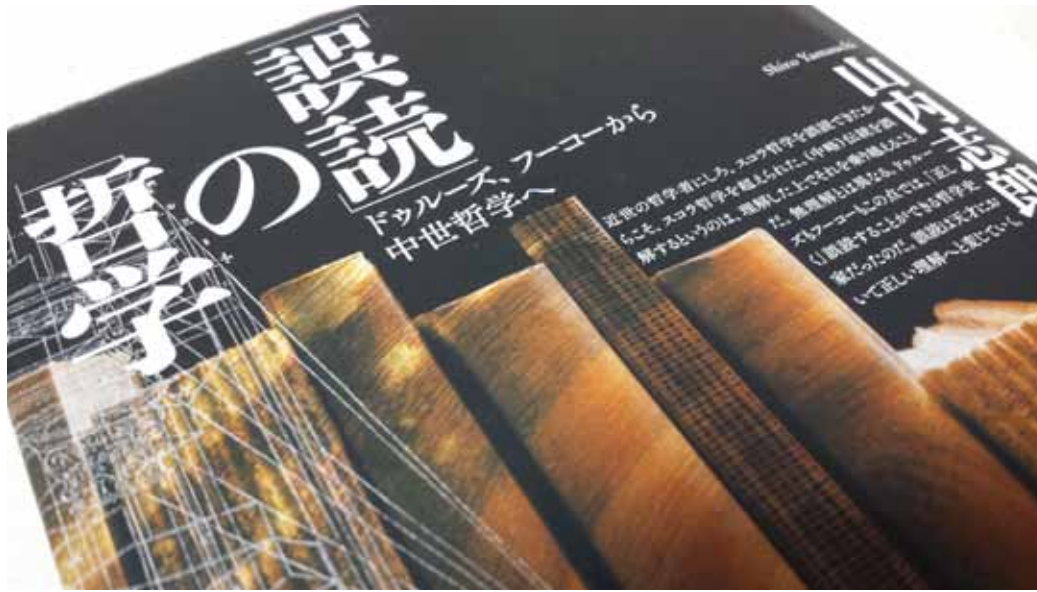
「私たちは、要約する。／作家は文章を書く時に要約し、読者は読む時に要約する。脳そのものが、要約し、置き換え、表象化するようになっているのだ。信憑性は偽の偶像であるだけでなく、到達できないゴールでもある。だから、私たちはこのようにして世界を理解する。これが、人間のすることだ。／物語を思い描くことは、絵の中で人物が影にされてしまうように、要約することである。そうすることで意味を作り出す。／その影が私たちが見ている要約された世界だ。要約されたものが、私たちが本を読む時に見るものであり、私たちが世界を読み解く時に見るものだ。／要約されて見えてきたものが、本を読むことの外見であるとなることができる（本を読むことが何らかのものに見えるのだとしたら）。」

読書という物語がある
本を読んでいるとき
本を思い出すとき
私たちは何をしているのだろう

すべては記憶のなかで
さまざまに要約され
変形されたアーカイブの
影絵が踊っているだけ

私たちは読書と称し
踊る影絵を思い浮かべながら
それを開示してみせるのだが
それは私だけの物語なのだ

記憶のなかは謎だらけ
迷路のなかで影絵は踊り
流れに浮かぶうたかたのように
はかなくたよりなげな夢の劇場

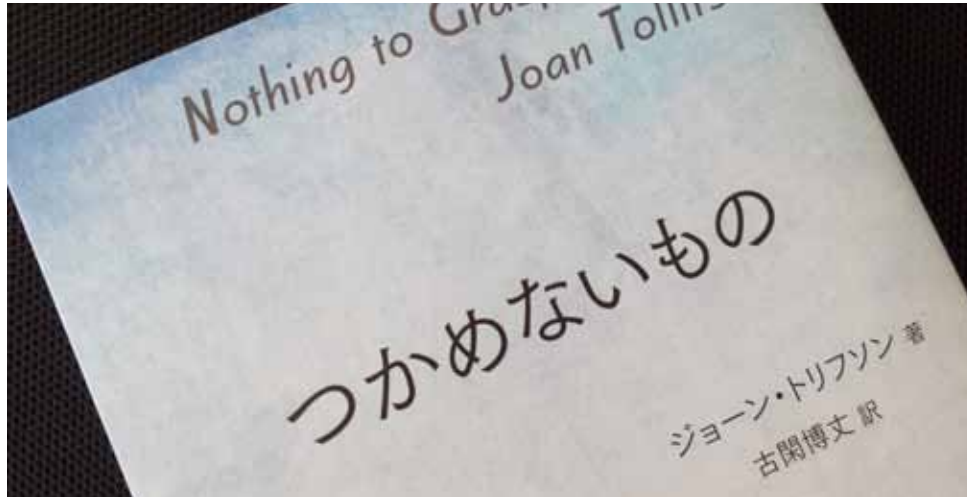


誤読の御託
並べてお宅
愛して口説
信じて功德
使ってお得

誤読を
やかましく
難ずる者よ
狭き箱に
囚われてあれ

■山内志朗『「誤読」の哲学／ドゥルーズ、フーコーから中世哲学へ』（青土社 2013.12）

「哲学史とは真理の探究の歴史とも言われるが、誤読の歴史と言うこともできる。真理が一つしかないということは、真理から遠ざかっていると思う。真理は無数の誤読を惹起し、招き寄せる。真理はそれを可能にする地平や条件の上のみ咲く。そしてその地平は一つしかないわけではない。（・・・）／哲学とは、誤読の連続であり、誤解なしに哲学は進展しない。哲学の中に一つの真理しか許容しない者は、哲学を殺そうとする<哲学嫌い>なのだ。（・・・）／ドゥルーズは誤読の天才だ。ドゥルーズの魅力は、テキストを縦横無尽に失踪し、燃やし尽くす青白い鬼火のようだ。ドゥルーズだけではない。哲学史を見ると、魍魎魍魎の巢窟、蓄積屋と破壊屋の魔窟だ。」



■ジョン・トリフソン『つかめないもの』（ナチュラルスピリット 2015.7）

「私たちひとりひとりが、これまで想像してきたよりもはるかに大きい（そしてずっと小さい）ものです。私たちそれぞれが、名前のつけようがない存在一気づきで、そこには中心がなく、それは誰のものでもなく、どこにも位置せず、境界がなく、かたちもなく、始まりも終わりもありません。私たちそれぞれが宇宙全体であり、宇宙が終わったときに残っているものです。そしてそれと同時に、まったくまぎれもなく、私たちの誰もがひとりの登場人物として役割を果たし、目が覚めているときの生という完全に唯一無二の映画をそれぞれが観ながら、その中で役割を演じています。雪の結晶と同じで、他の映画とまったく同じ映画はありません。（・・・）／すべては意識の遊戯だといういい方もできます。「意識」が何を意味するとしてもです・本当のところは、生というのは不可思議な出来事であって、科学的に、あるいは形而上学的にどう表現したところで絶対につかまえることはできません。それでも、ここに今あるということ——今この瞬間に起こっているこのこと——は否定できず、明白で、避けることができません。これが不可思議であるように見えるとしたら、それは説明しようとしたり、概念を使って意味をつかもうとしたりするときだけです。（・・・）／今この瞬間にまさにここにある、概念とは関係のない直接性を認識することです。そして実際のところ、この認識がここになんということはありません。というのも、この直接性でないものは何もありません。私たちの意識をどこかに連れて行ってしまふように見える思考やストーリーですら、この途切れのない出来事にほかなりません。そうしたものは、絶えず変化しつづけるくここ・今>という万華鏡の中の一時的な現れで、固有のかたちも持続する実体もないエネルギーのほとぼしりです。<聖なる現実>はまったく避けようがありません。隠れていたり、見落とされたりするように見えることがあってもです。解放とは、何かを新たに達成することでも獲得することでもなく、何らかの原因の結果でもなく、つねにここにあって分離のない直接性です。そこから切りはなされているものは何もありません。解放とはまさに出来事ではない出来事、転換しない転換、あるいは禅の言葉を借りれば門なき門です。それはく今・ここ>なのです。」

想像してごらん
ただ空があるだけ
朝が来て夜が来て
また朝がくる
星はまたたき
雲は流れ風は吹き
雨は降り雪は降るけれど
どんなときも空があるだけ
想像してごらん
空だけがあると

想像してごらん
ただ世界があるだけ
ただ私があるだけ
永遠とさえいう必要もなく
ただ世界はあり
ただ私はいる
始まることも終わることもなく
生まれることも死ぬこともなく
すべては変わり続け
すべては照らしあう
想像してごらん
ただ世界はいまここにあり
ただ私はいまここにいます

想像してごらん
ただ自由だけがあると
自由でないものは何もない
恐れる自由さえそこにはある
苦しむ自由さえそこにはある
秘密をつくる自由
壁をつくる自由
解放はいまここにある
門なき門はいまここにある
想像してごらん
ただ自由だけがあると



■吉福伸逸『世界の中にありながら世界に属さない』（サンガ 2015.8）

「社会に適応できることは別に悪いことでもなんでもないから、それはかまわないですよ。だけど、それに縛られることをぼくは好まないんですね。それはまったくおもしろくないからなんですけど。／不安にかられた自我は、他者と同じであることをよしとする傾向がある。だから、そんなに不安にかられていない自我は、他者と同じであることをよしとしない。ぼくは別に人と違うことをよしとするわけではないんだけど、社会に縛られて自分自身がそのことで苦しんでたくさんのかんことを抑圧している人を見ると、それは冗談にしか見えないんです。みずからの手でみずから作った妄想をベースにして自分を縛っているのに、「苦しい苦しい」と言っているんですから。それは単なるメロドラマなんです。」

「世の中で愚かなことをするのが本当にいちばんいいですよ。「なんて馬鹿なことをするんだ」というような愚かなことを、次から次へやっていけばいいんです。本当にそうですよ。この社会の中では愚かであるに越したことはありませんから。それをやっていて、いかに病理的にならなくするかっていうことですね。（・・・）／だからねキーワードは「愚かさ」と「勇気」なんですよ。」
「ヒマラヤの洞窟の中に住んでみようが、われわれは世界内存在なんです。だから、スーフィーの言葉でいわれる「世界の中にありながら世界に属さない」というふうなところに行ってほしいんです。超えるんじゃないですよ、世界にいながら属さないんです。」

属するというのは
類になることだ

類になって
社会のなかにあると
社会人になる

類になって
日本のなかにあると
日本人になる

類になると
類の決めた縄で
自分を縛ることになる

自分で自分の首を絞めながら
苦しみ続けるドラマを
演じ続けることになる

それを楽しむために
生きているのもよろしかりうが
世界の中にありながら
世界に属さないのも自由でよろしかりう



■納富信留『プラトンとの対話／対話篇をよむ』（岩波新書 2015.7）

「自分が間違っているかもしれないという可能性を心において、それを認める態度、それがソクラテスが「不知の自覚」のもとに遂行した哲学だと私は信じます。「現れ」に虚偽の可能性を認めることは、現れを通じ哲学することを可能にします。それは、絶対的な真理であると感じられる「現れ」を揺るがし、変化させます。これは、世界がそう現れる主体である「私」の変化です。……。ソフィストとの対決を通じて、その挑戦を退けるといふ思索において、私自身が「現れ」を介してこう変容していったのです。」

「おまえはソフィストではないか？」（・・・）／「ソフィストかもしれない。そう疑わない者は、哲学者ではない。」（・・・）／「私はソフィストではないか？」／そうして哲学者の道を歩みます。／ソフィストを忘却した世界に哲学者はいません。ソフィストを批判し、自身がソフィストではないと弁証していかないと哲学は成立しないのです。「弁証する」とは、言葉において問いと答えをつうじて、ひたすらに正しく哲学を行うあり方を、自ら示していくことです。哲学者はソフィストとの対において、初めて成り立ちます。（・・・）では、ソフィストはどこにいますか。社会の至るところ、たとえば、マスコミ、法廷、政治、商売、教育、学問の場。人間活動の世界は、ソフィストに満ちあふれています。しかし、ソフィストの問いは、そこでは終わりません。ソフィストはまさに私たちの内にいます。この「内なるソフィスト」と対決することが、あなたが始めた哲学なのです。」

私はソフィストではないか
そこから問いははじまる

私は何を知っているのか
私はほんとうに正しいのか
私は思いこんではいないか
私は見ないふりをしていないか

ひとをソフィストだと指摘し
自らへの問いなき者は
「魂の配慮」をなくした者だ

自らを正しいとし
自らを問わぬ者は
自らを正しいとし
自らを問わぬ者と争い続け
魂への配慮をなくす

私はソフィストではないか
その問いから
「魂の配慮」ははじまる



ナショナリズムを超えようとするれば
ナショナリズムという壁に塞がれる
壮大な社会的実験が翼を広げるとき
その翼の下はその間に隠れるだろう
ユートピアという場所を求めるなら
それはどこにもない場所へ姿を消す
哄笑はどこにもない場所で聞かれる
それがどんなに悲しく響くとしても
シャンバラの地は秘かに佇んでいる

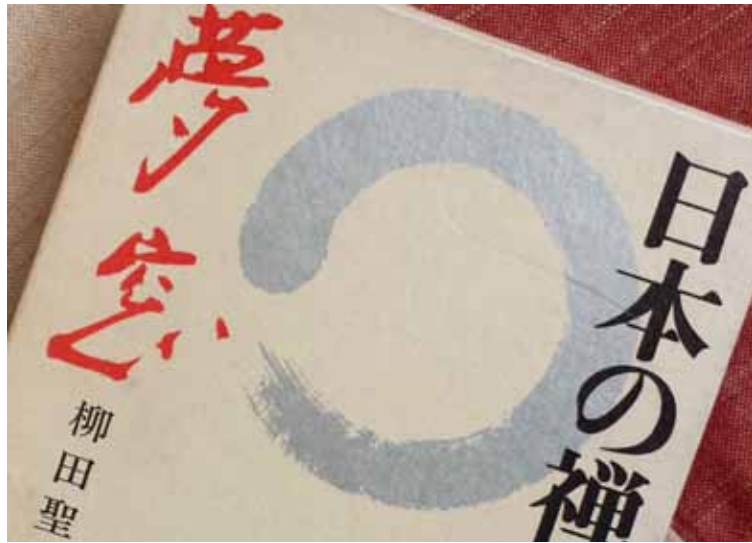
■棚瀬慈郎『ダライラマの外交官 ドルジーエフ/チベット仏教世界の20世紀』（岩波書店 2009.11）

「ドルジーエフは、ロシアを外護者としつつ、ダライラマの権威の元で全チベット仏教圏が団結して、独立状態を保つという構想を持っていた。そこには、チベット民族のみならず、ブリヤートやカルムイクを含む、全モンゴル系民族が含まれていた。／日本では、必ずしも一般に知られていることではないが、チベット仏教の信者はチベット民族に限られるわけではない。特にモンゴル民族は、チベット民族と歴史的にも深い関係を保ち、十六世紀以降は、チベット仏教が民衆の間にも深く浸透していた。清朝は、モンゴル統治のためにもチベット仏教を保護する政策をとり、特にモンゴルのジェブツンダンバ、内モンゴルのチャンキャは、ゲルク派の大ラマとして君臨していた。／また、ロシア帝国に組み込まれることとなったブリヤート、カムイルクといった一部のモンゴル民族の間にもチベット仏教は拡まっていた。」

「かつて内陸アジアのチベット仏教界では、同じチベット語教典の使用、リンガ・フランカとしてのチベット語、チベット医学や暦学を受容、共通の聖地とそこへの巡礼、ラサの三大寺やシガツェのダシルンボ寺をはじめとする学問寺への留学、さらにジェブツンダンバのような転生者がトランス・エスニック的に選定されることなどを通じて一つの観念的な共同体が形成されていた。ドルジーエフはそこにナショナリズムを超えた、しかし政治的にもリアルな共同体を形成しようと努力した。／彼の努力は、不幸なことに共産主義という二〇世紀の壮大な社会的実験と衝突することで、ほとんど実を結ぶことなく終わったといえよう。／しかし、国民国家というもうひとつの壮大な社会的実験もまた大きな矛盾を抱えている現在、仏教への信仰を核として、各民族を緩やかに結合させようとしたドルジーエフの構想は、慈雨の後、ひび割れた大地から浮き上がってくる緑の緑野のように、再び内陸アジアにその姿を見せつつあるようだ。その未見の大地に響き渡るドルジーエフの哄笑を、心ある者は聞かだろう。」

mediopos-258

2015.8.1



■柳田聖山『夢窓／日本の禅語録七』（講談社 昭和52年11月）

「かれは一切の仏語、祖師のさまざまの方便を、小玉と呼ぶ手段であるとする。それは、かれ自身の説法についても同じであり、かれの生涯の行動も、すべて小玉と呼ぶ手段であったということになる。つまり、わが語はすべて応病与薬の方便である。病を實としてはならぬというのであり、五祖の場合とは、その意味がむしろ逆になる。（・・・）／どうして、そうなったのか。じつは、ここに夢窓の本領、つまり体裁があった。かれは、理致と機関、仏教と禅といった区別をとりはらって、いずれも小玉と呼ぶ手段にすぎぬとする。すべてが虚仮となる。虚仮にこそ、力がこもる。／言うならば、夢窓は晩年にいたって漸く方便を脱し、真実をとく。かれにとっては、青年時代の密教も、禅も浄土も、王法も仏法も、鎌倉も京都も、すべてが同じように小玉であったわけだ。かつての目あては、檀郎にあった。今やさまざまの手段の差と、相互の矛盾を切りおとして、かれは自分自身の本身を明らかにする。生涯がかれの稽古であり、修行であった。もはや、禅も悟りもなかった。」

「さもあらばあれ、夢窓の虚仮の境界は、限りない夢幻空花を生み出す。その奥行きは怖ろしく、気味悪いばかりの深淵である。そんな、夢窓の高く広い思考が、室町文化の地下水脈をなしながら、けっきょくは表面にあらわれることなく、たいていはその造庭や、政治手腕や、書や詩といった文芸の面でのみ評価されるにとどまるのも、決して理由なしとすまい。」

方便は要るか
方便なくして
生きられぬは
なんと悲しき
されど方便を
砥石に使えば
生もまた裏腹

方便なきとき
すべては夢幻
すべては虚仮
夢の窓の彼方
虚無の彼方に
深淵は広がり
真実は現れる



過ちを恐れるなかれ
過ちを避けることを恐れよ
過ちが越えられるように！

違う道を歩むことを恐れるなかれ
同じ道を歩もうとすることを恐れよ
人の数だけの道が結びあわされるように！

個を恐れるなかれ
群れとなることを恐れよ
無を生きることを恐れるなかれ
無を通り抜けて目覚める個であるように！

■ミハエル・デーブス『今、神秘劇を生きる！／ルドルフ・シュタイナーの神秘劇会議』（シュタイナー演劇研究会／香川裕子編・訳 2015.7）

■ミハエル・デーブス『人生の危機と劇的緊張／ルドルフ・シュタイナーの神秘劇への導入』（ヤーデ・イニシアティブ／香川裕子訳 2015.4）

「アントロポゾフィーも、(…) 普遍的なアントロポゾフィーの理念から個人的なアントロポゾフィーに進まなくてはならないのです。(…) ルドルフ・シュタイナーの非常に典型的な言葉があります。(…) 「私は霊学の弟子を、その発展の軌道に乗せるための力を構築していきたい」と言ったのです。(…) /シュタイナーは、人は一本の道を歩み始めるということを望んでいたのです。叡智は人間が受けとめて、それによって宇宙と結びつくことに役立ちます。それに対し、道を歩むということは、毎日違う人間になるということなのです。それどころか、道を歩むなら、時として間違った道を歩む可能性もあるのです。(…) / 「本当の真理とは、避けられた誤謬ではなく、克服された誤謬である」というテーゼがあります。一つの間違いに気がついて、それを克服することは、ただ単に叡智を受け取るだけよりもずっと意義深いのです。後の場合は一般的な叡智があるのみですが、過ちを克服した場合には、私の個人的な叡智が獲得できるのです。そしてその時、皆が違う道を辿ります。皆がそれぞれ違う危機を乗り越え、違う道を歩むのです。そしてその結果として真理が得られたら、それは皆を結びつける真理となるのです。」

「ドイツ語には「私」を言い表すのに、素晴らしい「Ich（イッチ）」という言葉があります。それにNをつけると、「N ichs（ニヒツ）」、「無」という意味になります。語の字面だけ見ると、「Ich」と「Nichts」には共通の文字が多く入っています。本当の私を体験できるのは、何物も私を担ってきれない時だということです。／他の人のなかに潜り込むことは、まず、私に無を体験させます。そこを通り抜けて自我が目覚めるならば、その時の自我は、二つの対極的なものを一つに結びつけた自我なのだと言えます。この世界では、こちらかあちらかしかないようにになっています。地か水しかない、というように。だからこそ、この世界では個人的なものや社会的なものや両方を結びつける自我、その両方であるような自我が多くの人達の課題なのです。得てして私は、自我人間＝エゴイストであるか、共同体的・社会的人間であるかゆえに私の自我はどこかに行ってしまうという状況に陥りがちです。／けれども境界の向こう側では、その二つは結び合わされるのです。そのことを指して、「潜り込む」と言っています。ですからこの「潜り込む」は、神秘劇の中では聖なる言葉です。」

*潜り込む：untertauchen

mediopos-260

2015.8.3



喧噪を逃れ
夜のしじま
天の岸辺へ

光の中では
見えない汝
夜の太陽よ

時空を越え
光の内部へ
愛を捧げて

永遠に続く
聖なる眠り
夜の賛歌へ

■ノヴァーリス『夜の賛歌・サイスの弟子たち 他一篇』（岩波文庫 2015.7）

（『夜の賛歌』より）「朝は必ずやめぐり来なければならないのか。地上の権勢が終わりをとけることは、ついにないのか。厭わしい昼の営みは、夜の神々しい気配を みつくす。愛の密やかな捧げ物は、永遠に燃えつづけることはないのか。光の時間には限りがあった――だが、夜の支配は時空を超えている。――眠りは永遠につづく。聖なる眠りよ――この地上の昼の営みのなかで夜に捧げられた者に、稀ならずその恵みを与えよ。愚か者ばかりはおまえを見損ない、まことの夜のあの薄明のなかで、おまえが思いやり深くわれらに投げかける影のほかには、いかなる眠りも知ることはない。」

「大地の胎へ下ろう、／光の国をあとにしよう、／猛き苦痛や激しい喘ぎは／喜ばしい船出の合図。／われらは狭い小舟に乗って／すみやかに天の岸辺に到り着く。／永遠の夜こそ、讃えられよ、／永遠の眠りこそ、讃えられよ。」



夢を見る

夢から覚める

けれどそれも夢

その夢から覚めても

それもまた夢のまた夢

だれが夢を見ているのか

だれが夢から覚めるのか

夢から覚めたとき

夢見たはずの人がいない

そのときはじめて夢から覚めている

■トニー・パーソンズ『何でもないものが あらゆるものである／無、存在、すべて』
(ナチュラルスピリット 2015.7)

[あるものすべてはこれです。そしてこれは存在です。存在……存在が部屋であり、存在が肉体であり、存在が椅子なのです。あるものすべては存在です。／(…) あるものすべては存在で、存在は何でもないものであると同時にあらゆるものです。他者はいません。／あるものすべての中で、分離という考えがわき起こります。これは存在が分離した実体として現れて、自分を分離した個人であると夢見ているのです。ですから、現れているのは夢見る人で、その夢見る人の機能は個人として分離の中で夢見ることだけです。そしてそのことが起こるとき、不快感や喪失感があります。幼い子供として分離した瞬間から、探究があります。時計は時を刻み始め、探究が起こります。その探究とは、あの喪失感を埋めたいという願望です。／何かになるすべての教えが、あなたは分離した個人で、あなたには選択があり、どこかへたどりつくために努力しなければならないと教えます。そして、その全信念は夢のパワーと分離を強化しますが、それは夢にすぎません。それは物語です。それは存在が存在を探究する見かけの物語なのです。／でも、準備ができたとき、しかし実際は誰の準備ができたわけでもないのですが、何か他のことが開かれることは可能です……完全に革命的な別の可能性が開かれるのです。そして開かれることとは、夢からの目覚めがあるということです。でも夢から目覚めるのは夢見る人ではありません。夢見る人、探求者がもはや突然いなくなりますが、それが目覚めなのです。]

mediopos-262

2015.8.5



■秋岡久太『垂直空間／日常に潜むもう一つの空間』（行路社 1998.8）

「垂直空間とは日常にあって見過ごされてきたもうひとつの空間を指す。／決して、これは想像による空間ではなく、まして、霊や魂の類や第六感や気配といったもの、あるいは、幻覚などによるものを指しているのではない。／垂直空間は通常感覚器官、特に視覚を通して感知されるものである。だが、日常の延長ではとらえることが困難で、たとえばそれが目の前に現れたとしても、普通は軽視されたり無視されたりして、ほとんど気付かれることのない空間である。（・・・）／また、心理学の本などで見られる錯視の図のような特別な状態を対象にしているわけではない。／垂直空間は、設えられた世界ではなく、あくまで、日常の光景の中に潜むようにして存在している、「潜むように」といっても、身の回りで見られる空間の陰に隠れているわけでも姿を誤魔化しているわけでもない。気付かれにくいだけで、私たちが普段接している空間と同時にしかもそこに存在している。」

「ジグソーパズルに取り組んでいるとき、絵柄を中心に探していると当てはまる場所がどうしても見付からない一片が出てくることがある。そのようなものも、完成間近になって、形の凹凸に合わせてしらみつぶしに置いているうちに、必ずどこかに納まることになる。／いったん場所が落ち着いてしまうと、どこにも当てはまらないと決め付けていたその一片が、絵の一部として自然に溶け込んでいるのが不思議に思えてくる。そして、改めてその一片を見ると、それまでは目に留めもしなかったような些細な模様や陰影などが一定の意味を持っているのがわかり、わだかまりが氷塊するような気がする。／この氷塊するという感覚は常に垂直空間につきまとう。新しい垂直空間に出会い、足を止めてそれに入っても、いずれ日常の空間がそこを占めるときがやってくる。そして、垂直空間が閉ざされるその瞬間、垂直空間を生じさせていた物の形や構造などが氷塊するように姿を消す。／場合によっては、垂直空間が閉ざされ、状況が氷解する前に空間の構造が理解できるときがある。このような場合には、垂直空間に浸りながらそれをつくりあげている空間の日常での見え方を楽しむことができる。」

I

見えているのに見ていない
見ていないのに見えている

聞こえているのに聞いてない
聞いていないのに聞いている

わかっているのにわからない
わからないのにわかっている

II

右目は左目を知らず
左目は右目を知らず

けれどそれぞれの見る平面は
重なり合いながら立体を見せる

右手は左手を知らず
左手は右手を知らず

けれどふたつの手を合わせれば
拍手することも
そして祈ることもできる

mediopos-263

2015.8.6



■傳田光洋『驚きの皮膚』（講談社 2015.7）

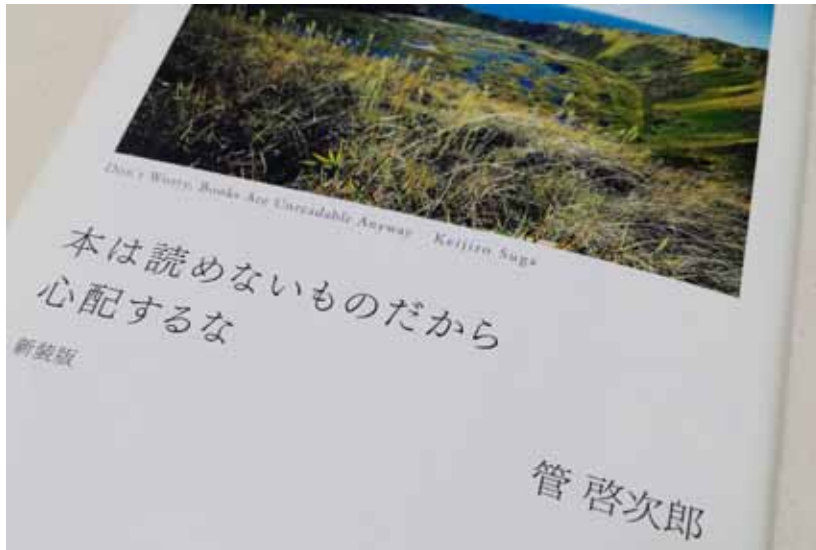
「芸術と科学は、原初、呪術あるいは宗教の一部であったと考えられます。しかしながら、芸術や哲学や社会科学や自然科学が、それぞれ異なる体系に分かれてから、科学がシステムを担う技術創造に向かう一方で、芸術は、そのシステムが個人の尊厳を忘れ、独り歩きし始めたときから、個人の尊厳をとりもどす営為に向かっていったように思います。あるいは、「システムのための芸術」は芸術ではない、それぐらいのことを主張すべきなのかもしれません。その芸術も20世紀初めには個人の意識にこだわるあまり、行き止まりの道に入り込んでしまった。そこから再び芸術は、その始まりのときの意識に戻るため、皮膚感覚や伝統的な芸術に回帰していったのだと感じます。／またルネサンス期以降の科学も、最初は観察するものと、されるものを峻別し、そのため、むしろ個人を管理するシステムの構築に貢献してきました。しかし非線形科学の登場によって、不条理に満ちた現実の人間や、その集団の行動を、そのまま科学の対象とすることが可能になることが期待できます。望ましくは科学も個人の尊厳をも取り込むように、発展してほしいと思います。／芸術も科学も、その深い普遍的なところに、その起源があると私は考えます。これまでお話ししてきたように、人間は生まれてから、まず皮膚感覚で世界を知り始める。また人類の進化を眺めると、裸の人間によって皮膚感覚を復活させたことから脳の発達が始まり、やがて皮膚感覚から言葉が生まれ、皮膚感覚から原始美術が現れました。そして、今もなお、無視域の領域で、皮膚感覚は私たちの全身やこころ（情動）に多大な影響を及ぼしている。その原初のかたちから、私たちのこれからの在り方を探したいと思います。」

ふれるとき
なにがふれているのか
なににふれているのか

ふれない
ふれます
ふれる
ふれるふしぎ
ふればば
ふれよ！

おどろくとき
なにがおどろいているのか
なにをおどろいているのか

おどろかない
おどろきます
おどろく
おどろくひふ
おどろけば
おどろけ！



■管啓次郎『本は読めないものだから心配するな（新装版）』（左右社 2011.6）

「本は読めないものだから心配するな。あらゆる読書論の真実は、これにつきるんじゃないだろうか。」

「本に「冊」という単位はない。とりあえず、これを読書の第一原則とする。本は物質的に完結したふりをしているが、だまされるな。ぼくらが読みうるものはテキストだけであり、テキストとは一定の流れであり、流れからは泡が現れては消え、さまざまな夾雑物が沈んでゆく。本を読んで忘れるのはあたりまえなのだ。本とはいわばテキストの流れがぶつかる岩や石が砂か樹の枝や落ち葉や草の岸边だ。流れは方向を変え、かすかに新たな成分を得る。問題なのはそのような複数のテクスチャルな流れの合成であるきみ自身の生が、どんな反響を発し、どこに向かうかということにつきる。読むことと書くことと生きることはひとつ。それが読書の實用論だ。そしていつか満月の夜、不眠と焦燥に苦しむ君が本を読めないこと読んでも何も残らないことを嘆くはめになったら、このことばを思いだしてくれ。／本は読めないものだから心配するな。」

本を読んでも
読まなくても
読めないのだ
心配いらない
書くことにも
意味などない
書けなくても
心配いらない
ただ経験せよ
その他の事は
心配しないで
生きることだ



■吉田健一『変化』（青土社 2012.11）

「或るものがそのものである為には絶えず変化する。さうすることでそのものであるのを続けるから我々はその変化の方には気付かず我々が精神の対象に置くのに馴れてあるものはいつも同じである積もりである。或はそれがいつも同じであることに間違いはないがその為に変化するとふことに注意が行かなくてこの二つが一つであるとは考へない。それが自分といふもの、或は自分の国、或は例へば生命とか暮らしとか人間とかいふやうなもの、或はそれと異なることがないその観念でその観念であることに含まれてゐる変化が頭にないから精神の働きが固定する。我々が聞き馴れてゐる日本といふのはとか人間といふものはとかいふ風な言ひ方が大概は耳に響くのもこの固定の為であつてそこにあるものは生きて働く観念でなくて符牒に過ぎない。我々がかうした符牒の横行でどれだけ我々の精神の自由まで制約を受けてゐるか解らなくて観念と符牒の違いを弁へてゐてもこれはそれだけ符牒を操るもの、或は寧ろそれに操られてゐるものにこと毎に進路を塞がれることでその災が相手の方にまで及んでも相手はただ符牒に絶るばかりである。／併し精神上のことは結局は各自の精神の問題であつてその限りでは外部からの制約といふやうなことを顧みる必要がない。もし同じであること、或るものがそのものであることがその為を持続して変化することでもあることに気付いたならばそれに従つて頭を動かさねばすむことでこれによつて符牒が介入する際は塞がれることになる。併しその上で頭を動かして改めて知らされるものは符牒、或は習慣による考への固定が我々が考へることなしに今まで持つてゐた考へにも及んでいることで我々は変化といふことと切り離して世界といふものを取り上げてそこでの変化は一般にさうと認められてゐるコロンブスがアメリカを発見したとかどことかで革命が起つたとかいふことなのを無意識で受け入れてゐることが解る。それならば我々も変化は目立つ形で起るもの、同じであるのは変化しないであることと固定した方向に頭を動かせることに馴らされて来たのである。」

わらないものを求め
変わらないものに依り
変わらないものとともに
ありたいと願うのだが
変わらない私は
私であることをやめる

私は変わる
変わることで
私は私であり続けられる
変わらないのは
生きて働く私である

変化のただなかで
変化するものとともにあり
見せかけの変化にとらわれず
変化の自由とともにあれ

mediopos-266

2015.8.9



■五味太郎『ときどきの少年』（ブロンズ新社 1999.4）

「少年は見るのが仕事です。それしか仕事がありません。感じたり考えたり、工夫したり試してみたりもするのですけれど、それはあくまで副業、本業はただ見ることなんだと、今振り返って改めてそう思います。／で、青年とか中年とかになりますと、見るだけでは仕事にならないので、ま、感じたり考えたり、工夫したり試したりするほうに少し重きをおいて、なんだかんだやるわけですが、でもやはりときどき、ただ見るという少年の魅力が蘇って、具体的には、仕事になんねえなあ、なんていう現象が起こるわけです。少年が日々の仕事の邪魔をするわけです。叱ってもやめないのでちょっと困るわけです。困ったって滞ったって別にいいじゃない、どうせ副業なんだから、なんて少年はなまいきなことを言います。それもそうだよねと中年が応えます。」

ただただギンヤンマを見ます
ギンヤンマの飛ぶのを追いかけます
ギンヤンマの産卵を息をのんで見ます
それがなんになるのかは考えません

ただただ水面を見ます
水面が風にゆらいで光るのを見ます
波紋が広がるのをどきどきして見ます
それがなんになるのかは考えません

ただただ紙飛行機を飛ばします
紙飛行機が空を舞うのを見ます
風が見えるように飛ぶのを追いかけます
それがなんになるのかは考えません

ぼくのなかの少年はただただ見ます
ときどきするものをただ追いかけます
見なければならぬものをただ見ます
それがなんになるのかは考えません



■平林章仁『橋と遊びの文化史』（白水社 1994.7）

「古代人の神話的思維によれば、神殿・柱・橋など聖性を認められた構築物を造立・造替することは、それらによって象徴される聖なる空間・時間・秩序などを創造・革新することであった。つまり、神殿・柱・橋などの構築は、聖の世界や聖的秩序の現出を視覚的に標示するものであった。／この新しい聖の象徴は、新しいがゆえに靈的営為に満ちあふれ、神々しい反面、荒々しくもあった。聖なるものが常に魅力と反撥、有益と危険、長生と死など、肯定的性質と否定的性質を合わせ持つことは、その本来的な特徴である。／橋に神が出現し、祭祀と喪葬が営まれたのは、こうした橋に対する聖觀念の肯反的特徴と関わる。また、陰陽師らの活動により増幅される橋への畏怖觀念も、橋に対する聖觀念と無縁ではない。／ところが、この聖性や聖性の保証する靈的営為は永遠不滅ではなく、時間の経過とともに減少・衰退していくものであった。これをそのまま放置すれば、聖なる世界は崩壊し、豊穡な生産や安寧な生活を脅かすことになる。したがって、ある一定の時間が経過すれば象徴を新しいものに造替し、その聖性を更新する必要があると考えられた。／伊勢神宮の式年遷宮や諏訪大社の御柱祭なども、建物や柱の耐用年数とは何の関係もない。それは時間の経過とともに現象・衰退した聖性を更新することにより、神との関係を再確認し強化する営みであったと考えられる。」

神は何処
神を呼ぶ

つなぐ橋
わたる橋

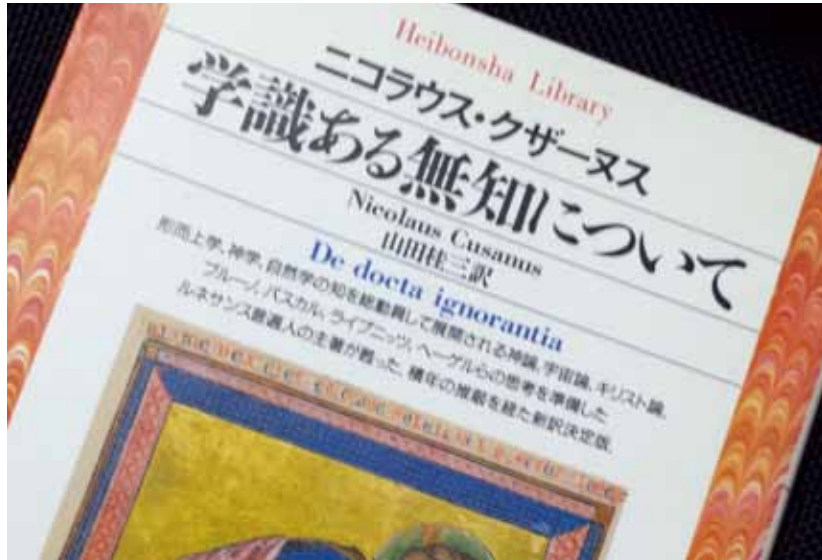
靈は宿り
靈は現れ

靈を祀り
靈に祈り

靈は衰え
靈は滅し

橋を建て
橋を替え

聖なる橋
妖しい橋



知られることは知られるが
知られぬことは知られない

知られぬことを知ったとは
だだの無知にすぎないのだ

知ることを誇る者は災いである
学識なき無知は道を過つであろう

知られぬことを知らぬとする者は幸いである
学識ある無知へと到る道を歩むであろう

■ニコラウス・クザーヌス『学識ある無知について』（平凡社 1994.11）

「探究は全て、難易の差はあっても、比例による比較によって成り立っている。したがって、無限なるものは、無限者としてどのような比例関係をも超えているために、知ることができない。ところで、比例関係とは、或る点では一致であるが、同時に他の点では相違であるから、数によらなければ決して理解されない。それゆえ、数は比例関係に置きいる全てのものを含んでいる。したがって、比例関係を成り立たせる数というのは、量のうちにあるばかりでなく、実体的にか偶有的にか、何らかの仕方では一致もしくは相違しうる全てのもののうちにある。おそらく、このことからピュタゴラスは、数の力によって万物が構成され、かつ理解されると考えたのだろう。／ところで、もろもろの物体の組成の精密さや既知なるものの未知なるものへの正確な適合は、人間の理性を超えている。そのために、ソクラテスには、自分の無知のほかには何も知らぬように見え、たぐいなき知恵の持ち主サロモンも「物事は何によらず難しい」ものであって、言葉で言い尽くすことはできないと言い、神の霊を享けた、いまひとりの人〔ヨブ〕は、知恵と叡智の座は全ての生ある者の目から隠されていると語ったのである。また、きわめて深遠な思想家アリストテレスでさえ、その第一哲学で、太陽を見ようと努める梟の場合と同じく、自然のうちの最も明瞭な事柄すら、われわれには難しいのだと言う。それゆえ、われわれの持っている欲望、物事を知ろうとする欲望が無意味でないとすれば、われわれは自分自身の無知を知ろうと望んでいることになる。そして、このような状態に完全に到達できたならば、われわれは学識ある無知に到達したのである。なぜなら、最も探究心の旺盛な人間にとっても、自己自身に内在する無知そのものにおいて最も学識ある者になるということが、学識上最も完全だからである。自らを無知なる者として知ることが篤ければ篤いほそ、人はいよいよ学識ある者となるであろう。私は、この目的のために、学識ある無知そのものについていくばくかの論述を試みたのである。」



■千田稔『うずまきは語る／迷宮への求心性』（福武書店 1991.5）

「遊びといえば、すぐにわれわれは子供の遊びのことを思い浮かべる。子供の遊びということも、たとえば英語にいう play といった意味として現代の日本語は語りかけるのだが、本来子供の遊びもまた、子供が「神遊び」を模倣したことから派生した言葉ではないだろうか、私は考える。／子供の遊びのなかで「かごめかごめ」は、巡回する遊びとしてよく知られている。（・・・）原義からいえば遊びは舞い踊ること、つまり巡回するのであるから、子供の遊びとはその典型として巡回するものなのだ。」

「輪舞という舞踏の問題は、まさにわが国の「舞」の意識と全く同様であって、それは神聖な演劇にほかならない。円を宇宙とみる観念は世界各地にあるのだが、日本語の「マル」という言葉は、象徴的に神聖な意味を表している。「マル」は「モロ」から転じたものであるが、三品彰英氏は、「モロ」はツングース計の諸部族や古代朝鮮における聖なる場所を表現するものであると述べている。したがって円という形は、本来聖なのである。」

「心理学者ユングの代表的著作『心理学と錬金術』には、ウロボロスについてしばしばふれられている。ウロボロスのイメージは永遠の円運動とみられるが、彼の理論の中核をなすマンダラ象徴にかかわる夢として、夢見者のまわりにグルリと円を描いている蛇という夢の分析が示される。よく知られているようにマンダラの図像は、ユングの心理学にとっては、意識も無意識も含めて心全体の中心とみなされるイメージで、ウロボロスの図像もまたユングによればマンダラなのだ。夢見者のまわりにグルリと円を描いた蛇、それは夢見者が描く円運動の図像である。」

渦巻き
ぐるぐる

無限を描く
無限を舞う

星は舞い
水は舞う

花は舞い
人は舞う

聖なる円
円は無限

渦巻き
ぐるぐる

無限を祈る
無限を生きる

mediopos-270

2015.8.13



■北村道子『衣裳術』(リトルモア 2008.2)

「ものをつくるようになったのは、小学校のとき。自分の空間を持った頃から。自分の部屋を与えられて、よく落書きをした。学校の図工の時間には、絞切り型のチューリップの絵が描けなくて、画用紙をグリーン一色で塗りたいかった。問題児扱いされて、校長先生の知り合いの先生によく課外授業を受けることになる。先生は、たぶん、ドイツでパウハウスの洗礼を受けてきた人だったと思う。いきなり『春の祭典』を踊らないか?」って言ったりする先生ですごくおもしろかった。父の影響もあるけど、その先生の教えがわたしの根本にあると思う。先生が「小遣いをためて旅に出なさい」と言う。子供も大人も関係なく、自分の家から出かけることは旅であると。「桜がきれいと思ったら、ずっと見ていなさい」とも言われた。そのほうが大事だからと。桜の美しさに心を奪われるよりも素晴らしい授業があれば、学校に価値を見いだすことができたけど、わたしはできなかった。そうやって、自分で考えることを学んだ。それはあるものを注視するっていうこと。見ることに一番意味がある。だから、学校に行きたくない子供がどうして学校に行こうとするのか。それが六十歳になろうとしているわたしには、今もわからない。」

先生がいたことはない
あるいはすべてが先生だった
嫌いな人だって
不快なものだって
反対の思想だって
すべてが先生だった
学ぶことができれば
すべてが先生だから
先生はいらなかった

人から教えられても
わかることはなかったから
自分で考えることを学んだ
だから学校では何も学べなかった
わからないことはわからないといった
わからないことでわかりたいことは
自分の納得のいくまで考えたかった
ひとつわかったとおもったら
その何倍もわからなくなることを繰り返した
わからないことだらけだから
人に教えることなど何もなかった
教えることができるとしたら
教えることはできないということだけ



■篠田正浩『河原者ノススメ／死穢と修羅の記憶』（幻戯書房 2009.11）

「日本の芸能を代表する歌舞伎や浄瑠璃の物語の多くは、荒唐無稽である。／また、新訳・旧約聖書にも非現実的な光景は頻出し、如何なる事実にもついた著作物よりも、イエスやモーゼの奇跡の物語が放つ力強さには圧倒されてしまう。／私は映画監督を職業としていたために、写真という機能がもたらしたリアリズムに悩まされてきた。もちろん、幻想世界を扱う映画はいっぱいあるが、リアリズムが映画芸術の王道として、荒唐無稽は排除されてきた。／しかしながら、歌舞伎の舞台がつくりだす異空間には、荒唐無稽というコトバだけでは切り捨てられない無垢や絶対性が横たわっているのでは、と私は感じつけてきた。『助六』の舞台は現代ポップアートに通ずる美学があふれている。また、盲目の景清の重案には殉教者の物語に連動する何かがある。この世界を、土俗的・宗教的という形容だけではない、もっと別のコトバで記述できないものか、と考えながら長い年月が過ぎた。／そして、ようやく映画の仕事から離れてみて、勃然と日本の伝統芸能の水底にもぐってみようと思った。リアリズムが知性による世界ならば、反知性の世界をめざすのもよいと。(・・・)／芸能には、進歩というコトバは不似合いである。／芸能が人間という生命体の粹組みでしか成り立たないとすれば、それはすでに宇宙の運命と連動する世界でもある。ちっぽけな人間の理性や知性のやりとりは、巨大な釈迦の掌で荒れ狂う孫悟空のそれであろう。芸能がつくりあげた荒唐無稽こそ、宇宙の片隅で漂う人間の叡智の産物かもしれないのである。」

知性は蠅取り壺から出られない蠅になったとき
みずからの痴性に気づけない道化でしかなくなる

みずからが蠅取り壺のなかにいると気づいた知性は
みずからを閉じ込めている壺を出す方法を試みる

生もみずからの死に気づいたときに
今みずからを閉じ込めている壺を出す方法を試みる

荒唐無稽を卑しめるなけれ
異空間を恐れるなけれ

ちっぽけな知性の迷路を抜けて
芸の水底を流れる河を泳いでみないか



■岩淵輝『生命の哲学／知の巨人フェヒナーの数奇なる生涯』（春秋社 2014.1）

「現代は物質的・経済的繁栄を優先するあまり、生命と心が踏みにじられる時代である。何かが狂っている。こうした風潮は、いったいつから始まったのだろうか。（・・・）かつての自分の専門分野だった生命科学と心理学の歩みを辿り、「元凶」的出来事を発掘することにした。／その結果、二つの出来事が浮上した。一つは、心の世界の数値化が成し遂げられたこと、もう一つは、「生命のモノ化」が進んだこと、言い換えれば、生命現象と死物の現象には本質的な違いが存在しないという見方が広まったことである。いずれも十九世紀の出来事だった。（・・・）／さっそく、これら二つの「元凶」的出来事を推進した人物、および推進に最後まで抵抗した人物を調べてみると、意外なことが判明した。心の世界の数値化を推進した人物と、生命のモノ化に抵抗した人物が同一人物だったのである。その人物とは、本書の主人公グスタフ・フェヒナーだった。／（・・・）フェヒナーは「フェヒナーの法則」として知られる数式によって心の世界を数値化する道を切り開き、精神物理学という心理学の一分野を築いた心理学上極めて重要な人物である。現代の多くの心理学のテキストには、哲学や思弁中心だった旧態依然の方法から脱却し、数値や数式を用いた科学的方法で心の世界を記述することに成功した人物としてフェヒナーが紹介されているが、フェヒナーの思想や哲学に関してはほとんど触れられていない。そのため、フェヒナーが心の世界を数値で記述したのは心理学を科学化するためだったと思われがちである。／だが、フェヒナーが心の世界の数値化を急いだ真の目的は、心理学を科学化することなどではなかった。まして、心や生命を軽視し、人間を機械のように見なす物質主義的世界観を広めることなどではなかった。それどころか、彼の目的は正反対のところにあった。当時、怒濤のように世を席卷し出した物質主義的思潮の中で、このままでは人間が単なるモノとみなされるようになることに危惧を抱いたフェヒナーは、物質主義者に抵抗するために物質主義者の言葉をもってゼーレの世界が存在することを語ろうとした。その必要にせまられてフェヒナーが挑んだのが、心の数値化だった。つまり、フェヒナーが心の世界の数値化を成し遂げたのは、生命や心をモノ化して軽視する風潮に歯止めをかけるためだったのである。」

その道の行く先は
ときに逆転してしまう

白は黒に
黒は白に

善は悪を开花させ
悪は善を自覚させ

我をなくして知らぬ我が屹立し
我が極北の全一へと向かい

平和を求め戦争が導かれ
戦争を辞さず平和が導かれ

歩む道を求めるならば
見えぬ道を求めるのがよろしかろう

道なき道をもとめるならば
中なる道をゆくのがよろしかろう



■橋本陽介『ナラトロジー入門／プロットからジュネットまでの物語論』（水声社 2014.7）

「英語やフランス語など、ヨーロッパの言語は、常に客観的な位置から物語世界を眺めて語ろうとする。従って、内面を書くときにも、間接話法で書くのが標準である。自由間接話法と呼ばれる話法が発達する以前、人物の内面を表す場合にはどうしていたかという、まず直接話法を使用し、引用符号で人物のセリフを出した上で、he said to himself(彼は独り言をいった、彼はひとりごちた)という語をその後に続けるという方法がよく使われた。伝統的な小説の邦訳において「彼は独り言を言った」というような文はよく見かけるが、人物たちは独り言をつぶやいているわけではない。心の中でそうつぶやいているのである。／つまり、人物の内面を地の文に溶け込ませる形で表す形式がヨーロッパの物語では多くなかったのである。そんななかで、比較的「自由」な形で人物の内面のセリフを表すために使われるようになったのが自由間接話法だと言える。／とはいえ、自由間接話法はあくまでも「間接」話法である。英語などでは登場人物を常に外側から客観的に描きつつけようとする。このため、人物の内面とは距離が取られている。／ところが、日本語の言語習慣ではそうではない。／(…) 邦訳では伝統的に、これを一人称に翻訳し、曖昧さを取り除くということが行われてきた。自由間接話法というより、普通の間接話法とみられる場合でも、時には人物のセリフに変えてしまう。(…) /なぜこのようなことが起こるのだろうか。実は、日本語は物語世界の内部に語りの位置を移動させ、そこにいる人物に成り代わって語ることがよくみられるのである。(…) /電話等で「(私は) 今からそこに行くね」という時、日本語では一人称主語を基本的に言語化しない。これは単に省略されているのではない。「私」から見て「私」は見えないために、言語化されないのである。加えて、相手のいるところに「行く」といっているのも、話し手の位置からの語り方である。／ところが同じ状況において英語では I'm coming という。この場合、英語では話し手と聞き手を共に中立的な位置から客観的に語っているのである。また、話し手が聞き手のところにやってくるという叙述の仕方を取っており、やはり中立的な語り方である。(…) /内面が表される場合でも、日本語では人物と一体化した語りになる。自由間接話法のように、あくまでも人物と距離が取られた語り方とは異なる。」

私は語る

私は私は語ると語る

彼は語る

と私は語る

と私は語る

語る私はだれか

私はどこにいる

と私は語り

語る私を探す

私は私に語る

私のなかの私に語る

私のなかの私はどこにいる

と私は私のなかの私に語る

とどこにもいない私は語る

mediopos-274

2015.8.17



二者択一はやさしい
与えられているからだ
そしてどちらを選んでも
シーソーゲームに過ぎない

両極をともに選択するのはむずかしい
矛盾を越えなければならないからだ
そして繰り返される問いの煩悶のなかで
統合への果てない道を歩まねばならない

■ミヒャエル・デーブス『三位一体 (上・下)』(キリスト者共同体・東京集会 2014.8/2015.8)

「お分かりでしょうか、詰まり病氣（悪）であることはどちらか一方を選択すれば、それで済むのですが、健康（善）である為には必ず両方を選択しなければならないのです。ところが人間は具体的な状況に対して、個別に行動することしかできないので或る時には気前よく、そしてまた別の時には儉しく、といったかたちで時の流れの中で振り子のように行き来することしか出来ないのです。詰まり赤と青の極端な領域、即ち悪の領域に於いては二者択一（悟性魂）であるのに対して、中心の善の領域に於いては両方を選択しなければならない（意識魂）のです。」

「何故なら敵対者が求めているのは正に、この「楽な」状況だからです。敵対者は人間が自ら決断するのを放棄することを望んでいるのです。中心に居続けることは疲れるからこっちに来い。こっちに来れば、ずっと今よりも楽になるよと。これが敵対者の誘惑、彼らが常に試みていることなのです。／もう一度言うと、赤と青の領域は二者択一であるのに対して、中心に於いては両方を選ばなければなりません。何故なら、ここで言う中心とは二つの極端がひとつになったものだからです。ですから、この中心は両局を内包しており、ひとつであるにも拘わらず完結しているのです。悪である為には、どちらかひとつを選択すればそれで良いのですが、善である為には微妙に違う二つの選択を、行ったり来たりしなければなりません。そして、中心に於ける二者択一の中で何を選ぶかは状況によるのです。詰まり中庸としての道徳性というのは、右や左や赤と青を隔てる境界線などではなく、常に呼吸しているのです。」

「道徳性とは、このように呼吸していなければならないものなのです。ですから道徳性は、心臓からやって来るのです。そして心臓に於いては息を吸って凝縮するという頭部の体験と、息を吐いて弛緩するという手足の体験の両方が存在します。心臓には青と赤という、二つの極の両者が見出せるのです。ところが興味深いことに中心の特性というものには未だ存在しません。何故ならば、それは全ての具体的な瞬間瞬間に、人間によって生み出されなければならないからです。／そして皆様、この様に中心に居続けるということ、即ち個的に道徳的であることが、どれだけ居心地の悪いことであるかを実感してください、これに比べて社会的な意味で道徳的であることは、本当に簡単です。」



神は言葉
人は言葉の器

言葉は訪れ
言葉は歌う

真言を歌えば
光は満ちる

天に捧げよ
光の言葉

地に満てよ
光の言葉

■鎌田東二『記号と言霊』（青弓社 1990.3）

「人間は言葉に似ている。人間は言葉から生まれたのだから、人間が言葉に似ているのは当然だろう。一人の人間の人体は、その人体を通過してきた言葉の織物にほかならないと思う。そこには死者の言葉も生者の言葉もこもごも織り込まれている。人体とは言葉の自己外化である。／このような言い方は、独断的な奇異な言い方にすぎないだろうか。しかし考えれば考えるほど、人間は言葉であると思わざるをえない。」

「折口信夫は、神の来訪、マレビトの訪れとは、文字通り、「音連れ」なのだと言った。私はこの折口信夫に深く納得する。神もマレビトも、つねに「音」とともに、さらにいえば「言葉」とともに人間の場所に訪れてくると考えられるからだ。その意味では、人間とは言葉が訪れてくる場所であり、人体は言葉の容器であるといえるであろう。人間とは、言葉が降り立ち、立ち上がり、屹立する場所である、と。」

「いったい、言葉はどこからやってくるのだろう。この問いはそのまま、人間はどこからやって来てどこへ行くのかという問いと重なっている。それは、行き着くところ、魂の存在を問うことにつながるだろう。魂とは何であり、それはどこからやって来てどこへ行くのだろう。その意味で、言語学や言霊学は霊学と通じている。」